X ’ mas プレゼント

天川充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｘ’ｍａｓ　プレゼント

【Ｎコード】
Ｎ４１１４Ｊ

【作者名】
天川充

【あらすじ】
クリスマスイブに出会う男女のお話。
思いつきで書いたものなので、完成度は低いです。去年のクリスマスに書いた短編作品。

Ｘ，ｍａｓ　プレゼント

今日はクリスマスイヴ。僕は一人ジャケットのポケットに手を突っ込み、街の雑踏を歩いていく。何か目的があるわけでもなく、何か狙いがあるわけでもなく、ただいつもと変わらない平日の夜がまた過ぎようとしている。

一年前、僕には一緒に来ようねと約束した彼女がいた。彼女は来年のクリスマスにとっておきのプレゼントをすると、僕に向かって微笑んだ。長く伸びきった綺麗な黒髪、薄く潤った魅力的な唇、ぱっちりつけまつ毛なんてしなくても見開いた輝く瞳、白く透き通った肌、少しかすれた甘い声。そのすべてが好きだった。

だけど、もう僕の隣には君はいない。いつも不安で、不器用で、繊細な僕の重さについていけないと、君は僕の前から消えていった。僕は自分を責めた。どうしてあのとき、こうできなかったんだろう。どうして引き止める自信がなくて、出て行くときもただ君の背中を前に立ち止まることしかできなかったんだろうって。

あれから半年の月日が流れたね。僕はあのとき忘れた何かを探すために、君と約束したこの商店街にやってきたのかもしれない。恋人たちがふれあい、子どもがはしゃぎ、一年でもっとも愛の溢れるこの日に愛を分けてもらいに。もしかしたら、なんてありえない君に会えることを密かに淡い期待しながら。

クリスマスイヴというのはどこのお店も大盛況。戦略に乗せられた人々が、心の中でサンタなんていないと思いながら、サンタにプレゼントをねだっている。サンタクロースって、本当は自分の目の前にいる大切な人のことなのかもしれないね。だから一人一人別の人を思い浮かべるんだ。

ケンタッキーのおじさんがこちらをちらりと見てにっこり笑っているのを見て、僕の心は少し癒された気がした。毎年その豪華さを増すイルミネーションは、眩しすぎて消えてなくなってしまいそう。

僕はふらっと何かに吸い寄せられるように、君と出会ったカフェテリアに入っていく。コーヒーの飲めない僕はレモンティーを注文して、隣に一人寂しく座っていた君が笑って声をかけてきたんだよね。あのときと同じ。違うのは君がいないだけ。今年のクリスマスは好きじゃない。

周りはカップルだらけで、どこもテーブルは空いていない。きょろきょろと見回していると、一人ぽつんとテーブルでたそがれているボーダーのセーターを着た女性と目が合った。こっちにおいでって言っているように思えて、吸い寄せられるように近づいていく。

「よかったらここどうぞ」
「ありがとうございます」
コーヒーのにおいが充満した。女性は童顔で、短い髪に口元にあるほくろが特徴的なかわいらしい子だった。二十代前半だろうか。君とは違うタイプだけど、僕には好感が持てた。初対面で気まずくて、ちらっと見ては逸らすの繰り返し。しばらく無言の状態でいると、僕の頼んだレモンティーが運ばれてくる。

「お一人なんですか？」
「ええ、友達はみんな用事があるって誰も予定が合わなくて。恋人とも半年前に別れて」
苦笑いで、てれを隠すように頭を掻いた。君と別れたことなんて目の前にいる女性には関係ないのに、何を話しているのだろう。僕は一体何がしたいんだろう。

「そうなんですか。……実は私も、さっき彼と別れたばかりなんです。お互い一人身って辛いですよね」
僕は不覚にも、目頭を落とす目の前の女性にドキッとしてしまった。君という存在がありながら。半年も忘れられずにいた君を初めて遠くに感じたんだ。クリスマスイヴという特別な日だからこそ、気持ちを高揚させるのかもしれない。周りの恋バナが耳にしきりに入ってくる。

「ごめんなさい。今日会ったばかりの人にこんな話してしまって」
「いえ、楽しかったですよ。今日はクリスマスイヴ。こうやって出会えたのもただの偶然なんかじゃないですよね」
僕は女性の目を初めて真剣に見た。なるほど綺麗な顔立ちをしている。純粋で清らかな女性を見て、僕は今度こそ信じられると思った。

「僕の名前は片瀬東吾。この後今日一日だけでもデートしてくれませんか？」
「私は中田悠美です。それじゃあどこに行きましょうか」
出会ったときはお互い暗い表情だったが、今は誰よりも眩しく輝いて笑っていた。惹かれるように出会った二人は仲良く店を出て、街に繰り出していく。

ここにあるのは恋愛感情ではないかもしれない。お互いの昔の恋人を忘れるための一瞬の気晴らしなのかもしれない。だけどクリスマスイヴという聖夜に出会えたことは、決して偶然なんかじゃないよね。ここからは前を向いて歩いていける。最高のクリスマスプレゼントは、きっとずっとこれからも胸に刻み込まれていくのだから。優しい気持ちをありがとう。メリークリスマス！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4114j/

X’mas プレゼント

2011年1月16日08時31分発行